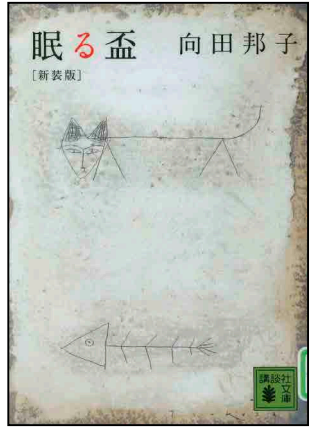


中野が舞台 ～その描写から中野をたどる～

中野という街は不思議な街である。現在は、好立地の住宅街、居酒屋の街、芸人の街、サブカルチャーの街と多面的な姿を有しており、23区の中でもそのイメージが定着しつつあるようだ。しかし、それは中野の現在の様相であり、時代によって大きく様変わりする。

まずは戦前、私小説や日記、随筆などで中野区在住の作家による当時の中野の姿が書かれた作品が多数存在する。作家古木鐵太郎は、田園風景の広がる野方・鷺宮の景観を自身の作品において幾度となく語っている。

××××××××××××××××
 ×『新装版 眠る盃』××××××××××××××××
 ×向田 邦子／著××××××××××××××××
 ×講談社 2008××××××××××××××××
 ×所蔵：東中野・野方××××××××××××××××



また中野の戦時中についても芹沢光治良などの作家がその作品の中で凄惨な被害やけたたましいサイレンの音、出征する兵隊たちの姿などを伝えていく。東中野で罹災した永井荷風の『断腸亭日乗』の記述を抜粋する。「風

向きを見はかり崩れ残りし石墻のかげに熱風と塵烟とを避けたり、遠く四方の空を焦す火焰も黎明に及び次第に鎮まり、風勢も亦衰へたれば、おそるおそる烟の中を歩みわがアパートに至り見るに、既に其跡もなく、唯瓦礫土塊の累々たるのみ。」その光景がありありと伝わってくるよう

だ。

戦後の中野を書いた作品には現在のの中野に向かう途中の姿を見ることが出来る。

例えば、むしうだくにこイ「中野のライオン」「新宿のライオン」。杉並に住んでいた向田邦子が1960年頃電車の窓から生きたライオンを見てその飼い主の青年と交流した経験が描かれている。この中にも中野についての描写を見ることが出来る。



××××××××××××××××
 ×『浄土』××××××××××××××××
 ×町田 康／著××××××××××××××××
 ×講談社 2008××××××××××××××××
 ×所蔵：東中野・野方××××××××××××××××

ジなどの特徴について述べられている。

今回紹介した作品以外にも様々な作品の中、中野区は何度も舞台として登場している。そこには我々が日常生活では見られない中野を見ることが出来る。

青年はもともと新宿御苑近くにいた姉の逝去からライオンを引継ぎ、中野に引っ越してくるようになった。今ほど猛獣に規制はなかったが、家では檻に入れて飼っており、ほとんど吠えることはなかったという。偶然出会ってしまった近所の人を驚かせることはあったが、それを縁